はしがき

私は中学時代“文法”が大好きだった。中学生になって初めて学習する学科に“国文法”といふ名前が登場し、一年生では“文語文法”を学習した。

中学生になって「一番いやな学科は」と言ふと、たいていの者が「文法」だと言ふ。それで、勉強嫌ひのくせに負けず嫌ひの私は、他の学科の学習や復習はほとんどしなかったが、“文法”だけはよく予習も復習もした。

そのため、試験ではいつも百点を取った。それで、初めは面白い学科と思ってゐた訳でもないのに、だんだんと面白いと思ふやうになって行った。

一年生の時だったか、二年生の時だったかはっきり覚えてゐないが、“動詞活用早見

表”といふ、二枚の円盤を組合せたもので、動詞の活用が直(すぐ)に解る仕組の器具を創り、それを文法担任の先生に提出したところ、これを帝国発明協会に出展して下さって、そのお蔭で発明協会から褒状(ほうじやう)を授かり、全校生徒の前で表彰されたことがある。

三年生になった頃には、文法に関する問題はすべて難なく解けるやうになった。四、五年生対象の問題でも解けないものはまづ無いやうになった。それで、図書館に行き、たまたま三矢重松博士の『高等日本文法』を見つけ、これに読み耽ったものである。

また、中学では学習しない“漢文法”にも興味が及び、図書館にある本は片っぱしから借りて読んだ。その中には、後に親しく教へを受けることになる諸橋轍次先生の御著書もあった。

これらの本のお蔭で、今度は漢文が面白くなった。皆が難しいと言ふ漢文の白文(はくぶん)が、漢文法のお蔭で読めるからである。四年生になると、受験組と就職組とに分かれ、受験組では入試に備へて模疑テストが時々行はれたが、漢文ではいつも最高点を取ることが出来た。普通、七〇点で最高になれると言はれてゐたのに、私は九〇点より悪い点を取ったことが一度も無かったのである。これは、私が“漢文法”を学習したお蔭だと思ふ。

私が漢文を専門とする大東文化学院に入学したのは、しかし、漢文をやりたいからではなかった。四年生の時に父を失った私には、学費のかかる学校は選べなかったことが理由の一つだった。

もう一つの更に大きな理由は、卒業すれば高校教員免許状が無試験で取得できることであった。当時はそれは実に貴重な免許状で、それを取得してゐた先生は県全体でも五人とはゐなかったはずである。四年生の時、漢文の先生が高校教員の検定試験に合格されたが、その年の合格者は全国でも僅かに三人だったと聞いた。

だから、卒業したら安定した教員生活が送れるに違ひない。教師を勤めながら“国文法”の研究を続けよう、といふのが私の終局的な希望だったのである。

私の中学五年間は、学習の面だけで言へば、文法に明け暮れたと言っても決して過言ではないと思ふ。“漢文法” をやると、それが“英文法(これは中学の学科にあった)”によく似てゐることが解り、とても面白く思った。

やがて、漢文法と英文法とはよく似てゐるが、国文法とは大変に違ってゐることが解って、それがまた面白くなった。しかし、やって行くうちに、今の国文法はとても国文法とは言へないもののやうに思はれて来た。

「これはどうしたって欧米語の立場から考へた国文法でしかない。日本語の日本語らしい所の解説が回避されてゐる。よし、ほんとの日本語の立場から国文法を考へ直してみよう」と思ふやうになったのである。

だから、折角大東文化学院に入学しても、今から思ふと全く勿体ない事であったが、当代一流の学者(当時の大東文化学院は、国会議員全員一致の決議により、日本精神のバックボーンである儒学振興のために設立された学院であったから、文字通り我が国第一級の学者が集まってゐた)の講義を傾聴するよりも、文法の独学に精を出してゐた。

当時、学院は九段坂上に在り、坂下には有名な大橋図書館があったので、私は学校が終ると、毎日、この図書館に行き、十時の閉館時刻まで、夕食もせずに文法書を読みあさった。山田孝雄博士の『日本文法論』『奈良朝文法史』『平安朝文法史』を始め、木枝増一氏や松下大三郎氏の“文法書”などを次々と読破して行ったものである。

初めの一、二年には、“国文法”や“国語学”など好きな学科があった。これらの学科は、前年までは橋本進吉先生だったが、私たちはその後を引き継がれた東条操先生の

講義を受けた。

東条先生は、大層温厚な先生でゐらっしゃったから、私の突飛な質問にもいつも穏やかなお顔で答へて下さった。しかし、穏やかな中にも当惑されたお顔が伺はれたので、つい突込んだ質問も出来なくなり、適当に切り上げて引き下ったものである。もしも、もう一年早くて、橋本先生だったら、思ひ切った質問も出来て、私は事に依ると今と異った道を歩んでゐたかも知れない、と思ふ事がある。

四年めに、岡井慎吾博士に“説文”の講義を受けた。説文学は長い間、斯界の第一人者、加藤常賢博士が担当されてゐたが、加藤先生は京城帝国大学に赴任され、私たちは岡井先生に学んだのであった。（加藤先生は戦後、大学に変った大東文化に帰られ、東洋研究所所長に就任、私を所員に招いて下さった）

私は、岡井先生の説文の講義によって、初めて“漢字の面白さ”といふものを知った。

私の一生は岡井先生との出会ひにより決定した、といふことが出来る。

私が学生時代、教授のお宅を訪問したのはただ岡井先生のお宅だけである。先生は、一年か二年お勤めになっただけで、大磯に隠棲（いんせい）されてしまった。お引越しの時、お手伝ひに行き、山のやうな先生の蔵書を箱詰めした時の様子は、今でも鮮やかに覚えてゐる。

戦争のために卒業が半年繰り上げになり、昭和十七年九月に卒業、十月一日入隊と決った。入隊前の一日、大磯のお宅に先生を訪問し、永のお別れの御挨拶を申し上げた。しかし、死を覚悟してゐた私は図らずも戦死を免れて終戦を迎へたが、その間に先生がお亡くなりになり、やはりあの時の訪問が永のお別れになってしまったのであった。

軍隊でお便りを頂いた。そのお便りの中に先生の詩があって、その転句に「酔臥沙場

匹夫事(酔うて沙場に臥すは匹夫の事)」といふ言葉があった。私も若かったから、「酎臥沙場君莫笑、古来征戦幾人回(酔うて沙場に臥す、君笑ふことなかれ。古来、征戦、いく人か帰る)」といふ王翰の気持が無いではなかったから、先生の御教訓が身に滲みて有難かった。私が生きて帰れたのは先生の御教訓のお蔭だと思ってゐる。

私は、大東文化学院在学の六年間を二期に分けると、前半は“国文法”“国語学”に専心し、後半は“説文学”を中心に、漢字の研究に専念したと言へると思ふ。

戦争から帰って、高校の教師になったが、昭和二十六年、教育委員会指導主事になり、中学生の半数が、数学・理科・社会科の教科書が満足に読めないといふ実情を視、小学校の漢字教育の重要性を感じて、その教育法発見のため、昭和四十二年まで、小学校教諭として十四年間努力し、「かうすれば必ず、中学に進んで教科書が読める」石井方式漢字教育を作り上げた。

漢字教育については、研究したい事は大よそし尽し、言ひたい事も言ひ尽したやうに思ふ。それは『石井勲の漢字教室』全九巻に盛られてゐる。また、辞典も、三省堂から『学習漢字図解辞典』及び『常用漢字学習辞典』を刊行した。

これからは、“国語”そのもの、特に“国文法”“日本語の特質”について考へたいと思ふ。本書は小手調べに、今まであちこちに書いて来たものを一つにまとめたものである。

私も、来年は所謂“古稀”の年を迎へる。これから果してどれだけの事が出来るか、それは判らないけれども、この問題を研究することは飯よりも好きであるから、生ある限りこの問題に取り組み、考へ続けて行きたいと思ってゐる。

昭和六十三年七月一日

石井勲